８　次の文は、建礼門院右京大夫の歌集の一節で、死別した恋人、平と過ごした日々を回想して、雪の日の出来事や山里でのをったものである。これを読んで、後の問に答えよ。　　　　　　〈京都大〉二〇二二年度出題

雪の深く積もりたりしあした、里にて、荒れたる庭を見いだして、（１）「けふ来む人を」とながめつつ、薄柳の、紅梅の薄衣など着てゐたりしに、枯野の織物の狩衣、の衣、紫の織物の着て、ただひきあけて入り来たりし人の面影、わがありさまには似ず、いとなまめかしく見えしなど、常は忘れがたく覚えて、（２）年月多く積もりぬれど、心には近きも、返す返すむつかし。

年月の積もりはててもその折の雪のあしたはなほぞ恋しき

山里なるところにありし折、なる有明に起きいでて、前近きに咲きたりし朝顔を、ただ時の間のさかりこそあはれなれとて見しことも、ただ今の心地するを、（３）をも、花はげにさこそ思ひけめ、なべてはかなきためしにあらざりけるなど、思ひ続けらるることのみさまざまなり。

身の上をげに知らでこそ朝顔の花をほどなきものと言ひけめ

（『建礼門院右京大夫集』より）

注（＊）

　人をも、花はげにさこそ思ひけめ＝『拾遺和歌集』の和歌「朝顔を何はかなしと思ひけむ人をも花はさこそ見るらめ」を踏まえた表現。

◎問１　傍線部（１）で、作者は「山里は雪降り積みて道もなしけふ来む人をあはれとは見む」（『拾遺和歌集』）という和歌の一節を口ずさんでいる。このときの作者の心情を説明せよ。

問２　傍線部（２）を、適宜ことばを補いつつ現代語訳せよ。

◎問３　傍線部（３）を、「さこそ」の指示内容を明らかにしつつ現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ雪の積もる日に、里にいる自分をわざわざＢ恋人資盛が訪ねてきてくれたらと期待し、もし訪ねてきてくれたらＣ彼を愛しく思おうという思い。

Ａ＝３〔「雪の積もる日」などの状況と、「里」などの場所を表す表現を欠くものはそれぞれ減点１。また、そのような状況を押してわざわざ来るというニュアンスを欠くものは減点１。〕

Ｂ＝４〔「期待」などの心情を明示していること。「資盛」を単に「人」とするものは減点３。〕

Ｃ＝３〔「あはれ」は「愛しい」などの対象に対する感情、もしくは「情が深い」などの対象に対する評価として訳すこと。〕

問２　Ａ年月は長く経ったけれど、Ｂ雪の日の朝の資盛の訪れがＣ心の中では最近のことと思われるのも、Ｄほんとうに厄介である。

Ａ＝２〔「積もる」が時間の経過を表す訳になっていること。〕

Ｂ＝３〔「雪の日の朝」と「資盛の訪れ」という内容がともにあること。〕

Ｃ＝３〔「近し」が時間的な近さを表す訳になっていること。〕

Ｄ＝２〔「返す返す」の不適切な訳は減点１。「むつかし」の不適切な訳は０。〕

問３　Ａ人は朝顔のことをはかないと思うが、Ｂ人のことをも、朝顔は本当にはかないものだと思っていたのだろう。

Ａ＝２

Ｂ＝８〔「さこそ」の指示内容を誤っているものは０。「げに」「けめ」の誤訳などはそれぞれ減点２。文末は逆接の表現でもよい。〕

【現代語訳】

雪が深く積もっていた朝、里（＝実家）で、（私は）荒れた庭を（部屋の内から）見出して、（拾遺和歌集の歌を思い浮かべて）「けふ来む人を（＝今日来る人がいるとしたら、その人を愛しく思おう）」と口ずさみながら、薄柳の衣、紅梅の薄衣などを着て座っていたところ、枯野の（色目の）織物の狩衣、蘇芳の衣、紫の織物の指貫を着て、直接（戸を）引き開けて入ってきた人（＝資盛）の姿が、私の様子とは違って、たいそう若々しく美しく見えたことなどが、いつも忘れがたく思い出されて、問２年月は長く経ったけれど、心では最近のことと思われるのも、ほんとうに厄介なことだ。

すっかり年月が経ってしまっても、あのときの雪の朝（のこと）はやはり恋しいことよ。

山里にある住まいにいたとき、趣のある夜明けごろに起き出して、建物のすぐ近くの透垣に咲いていた朝顔を、ほんのひとときの間の花盛りであるのがしみじみと物悲しいことよと思って見たことも、たった今の（ことのような）心地がするが、（あのとき）問３人のことをも、（朝顔の）花は本当にそのように（＝はかないものだと）思っていたのだろう、普通にはかないなどということですんでしまう例ではなかったよなどと、自然と思い続けられることばかりさまざまである。

（あのとき、私たちの）身の上を（はかないものだとは）本当に知らずに、朝顔の花をわずかな時の間のものと言った（が、本当にわずかな時の間のものとは、人のことであった）よ。